

気になった親娘

2009.11.01

久家 隆男

予定していた井の頭の山行がリーダーの都合で延期になったので、代わりの山として久しぶりに生籐山に登ることにした。生籐山への登山口は、上川乗や鎌沢入口があるが、今日は石楯尾神社前を選択した。

上野原駅前からバスに乗り、石楯尾神社前で下車した人は10人位で、その中に幼稚園児位の女の子を連れた40歳前後の男性がいた。父親と娘に見えたが、母親はいなく二人だけだ。バス停の近くは山裾に民家が点在しているので、自宅に帰るところかと思った。しかし、父親は山支度で、女の子も小さな玩具の様なザックを背負っている。奇妙に思いながらも私は二人より先に歩き出した。

15分位歩くと体が温まってきたので、道端でジャンパーを脱ぐ。振り返ると、先程の二人が登ってくるのが見える。こんな小さな子を連れて登るのかと、あきれた。やがて道は急坂になり、石で歩き難い所もある。ところが、私の30～50m後を二人が離れず付いてくる。父親は娘の手を引いているが、引きずっているようにも見える。急坂なので私の歩みは早くないが、二人の歩みも私と変わらない。女の子の背丈からすれば、歩幅は大人の半分だろう。そうすると、女の子は急坂をかなりのハイペースで登らされていることになる。バス停から同じ頃にスニーカー履きの男性3人が登り出したが、彼らは二人より遅れている。「折角来たのだから登らなくては・・・」という父親の声が聞こえる。女の子は無言だが、泣き出しそうに見える。父親が怖いので我慢しているのだろうか。父親が自分の趣味で山に登るのはよいが、山の楽しさが分からない幼い娘を強引に登らせるのは問題ではないか。これは一種の虐待と言えないか。女の子が泣き出しても登らせるようだったら、父親に何か言わない訳にはゆかない。しかし、今の状態で言っても「余計なお世話だ。」と言われそうだ。

楽しくない気持を抱えて急坂を登り切り、佐野川峠に着いた。バス停からのコースタイムは50分で私は52分。標高差は360m。当然私はここで小休止にした。やがて、二人も登ってきたが、何と休憩せずに私の前を通り過ぎて登って行く。このとき初めて間近で父親を見た。体格のよい男だが、山慣れた人が醸し出す雰囲気はない。私は5分後に二人の後を追ったが、追いつかない。二人はもう1時間以上も歩いているのに大丈夫なのかと気になっているうちに、道端のベンチに座っているのを見つけた。女の子は黙っておやつを食べていて、休憩のためか安らかな顔をしている。

私はそのまま三国山に登り10分程度休憩したが、その間に二人は登って来ない。先程のベンチで引き返したか、それともゆっくり休憩してから登ってくるのか。嫌々でも女

の子が父親に付いて登れるのは、今まで何度も連れ出されているからかな。でも、もう少し大きくなって反抗できるようになったら、きっと山には行かないだろうな。そして、九分九厘は山が大嫌いな人になるだろう。しかし、大人に伍して穂高や谷川岳に挑む小学生になる可能性も全くないとは言えないな。山で幼い子を連れていて人をときたま見るが、殆どの場合は両親のどちらかが専用の背負子で子供を背負い、もう一人が大きなザックで3人分を背負っている。父親と幼い子だけというのは珍しい。女の子が歩けなくなったら、あの父親は女の子を抱きながら急坂を下るのだろうか。足下が見えなくなって危険だな。休憩中に余計なことが頭をよぎる妙な山行になった。

生籐山を越え、茅丸、連行峰、醍醐丸、陣馬山と歩く。10月最終日になって今秋初めて秋山の雰囲気堪能する。標高900m以上は紅葉しているので、2週間も経てば紅葉は標高400mのむかし道に下りてくるだろう。陣馬山からの下りでは14時過ぎになっても登ってくる人が何人もいる。若い人が多く、急坂を元気よく登ってくる。しかし、軽装だ。多分、携帯電話は持っていてても灯具は持っていないのではないか。同じ道を下れば、彼らの足では明るい内にバス停に戻れるだろう。しかし、これでは僅かなアクシデントがあっても一大事になる。彼らが遭難予備軍に見えた。